

1930年代の分析哲学と科学哲学

小山 虎（大阪大学）

要旨

本提題では、1930年代の分析哲学と科学哲学の状況を紹介する。本提題の出発点となるのは、タイトルに「分析哲学 (analytic philosophy)」という言葉が入った最初の論文とされる (Beaney 2015) Nagel 1936である。この論文では、分析哲学の中心地として、Moore、Russell、Wittgensteinのケンブリッジ、論理実証主義のウィーンとプラハ、ポーランドのワルシャワとルヴォフが挙げられている。

このようにNagelは分析哲学の祖とされるMoore、Russell、Wittgensteinと共に、ウィーン学団とルヴォフ・ワルシャワ学派を並べているが、これは以下の二点で興味深い。(1) 現代の分析哲学の一般的イメージとおおよそ合致しているだけでなく、科学哲学の範囲にも含まれる。(2) 三者はゆるやかな影響関係にある。Wittgensteinとウィーン学団の関係はいうまでもない。RussellとMeinongの間の論争は分析哲学の常識の一つだが、Meinongとルヴォフ・ワルシャワ学派の祖TwardowskiはどちらもBrentanoの弟子である。そしてウィーン学団とルヴォフ・ワルシャワ学派の間には密な交流があり、例えばTarskiがウィーン、Carnapがワルシャワを訪問している。

ウィーン学団とルヴォフ・ワルシャワ学派の関係はもっと密接なものであった可能性もある。ルヴォフ・ワルシャワ学派は統一科学国際会議 (International Congress of the Unity of Sciences) に毎回参加者を出すなど、統一科学運動に大きく関わっていたからである。1934年にプラハで開催された「プレ会議」と1935年にパリで開催された第一回統一科学国際会議には、Tarskiをはじめ多数のポーランド人が参加していることが確認できる。

しかし、Nagel論文には大きな欠落もあることは見逃せない。Reichenbachなどのベルリングループのことがほとんど言及されていないのである。ウィーン学団とベルリングループは共同で統一科学運動を推進していたこともあり、拠点は異なるものの同一視されがちだが、近年ではベルリングループの独自性が明らかになっており、新カント派（具体的には、マールブルグ派のCassirerと新フリース派のNelson）からの影響が強いとされている (Milkov 2013)。それに対し、Nagelが言及するケンブリッジ、ウィーン、ワルシャワはどこも新カント派との影響は特に知られていない。

加えて、ベルリン学派と後継者たちは、ピッツバーグを中心にアメリカにおける科学哲学の中心的役割を果たしていると主張されている (Rescher 2006)。

文献

- Beaney, M., 2015, "Chronology of Analytic Philosophy and its Histography", in M. Beaney, (ed.), *The Oxford Handbook of The History of Analytic Philosophy*, DOI: 10.1093/oxfordhb/9780199238842.013.0006.
- Milkov, N., 2013, "The Berlin Group and the Vienna Circle: Affinities and Divergences", in N. Milkov and V. Peckhaus (eds.) *The Berlin Group and the Philosophy of Logical Empiricism*, Springer, 3-32.
- Nagel, E., 1936, "Impressions and Appraisals of Analytic Philosophy in Europe, I", *Journal of Philosophy*, 33(1), 5-24.
- Rescher, N., 2006, "The Berlin School of Logical Empiricism and Its Legacy", *Erkenntnis*, 64, 281-304.